

Prevalence and patterns of tooth agenesis among different sagittal skeletal malocclusion classes in a Japanese orthodontic population

太田 信

論文内容の要旨

歯の先天性欠如は発現頻度が高く、人種や民族間で異なる。従来、近遠心的顎間関係と歯の先天性欠如の発現頻度の関連に共通の見解が得られておらず、日本人において近遠心的顎間関係と第三大臼歯以外の特定の歯の先天性欠如の発現頻度の関連を調べた報告はない。本研究は、近遠心的な骨格性不正咬合と第三大臼歯、第二小臼歯、上顎側切歯および下顎切歯の先天性欠如の発現頻度と発現様式の関連について検討した。資料は、日本歯科大学新潟病院小児・矯正歯科に来院した患者 1020 名（男性：355 名，女性：655 名）の側面頭部エックス線規格写真とパノラマエックス線写真である。ANB 角で患者を Skeletal Class I (407 名), Skeletal Class II (342 名), Skeletal Class III (271 名) の 3 群に分類し、歯の先天性欠如の発現頻度と発現様式を比較し、以下の結果を得た。

1. 第三大臼歯の先天性欠如歯数の分布は Class II と Class III の間で有意な差が認められたが、第三大臼歯以外の歯の先天性欠如歯数の分布は各骨格性不正咬合間で有意な差を認めなかった。
2. 上顎両側性第三大臼歯と片側性・両側性第三大臼歯先天性欠如の発現頻度は Class III が Class II より有意に高く、下顎片側性・両側性第三大臼歯先天性欠如の発現頻度は Class I と Class III が Class II より有意に高かった。
3. 両側性第三大臼歯と片側性・両側性第三大臼歯先天性欠如の発現頻度は、各骨格性不正咬合において、上顎が下顎より有意に高かった。
4. 上顎側切歯、下顎切歯、上顎・下顎第二小臼歯の片側性、両側性および片側性・両側性先天性欠如の発現頻度は、各骨格性不正咬合間で有意差はなかった。
5. 下顎片側性、両側性および片側性・両側性切歯先天性欠如の発現頻度は、各骨格性不正咬合において、上顎側切歯のそれより高い傾向があった。
6. 片側性、両側性および片側性・両側性第二小臼歯先天性欠如の発現頻度は、各骨格性不正咬合において、下顎が上顎よりも高い傾向があり、特に片側性・両側性先天性欠如は Class II で有意差が認められた。

以上より、日本人矯正患者において、第三大臼歯先天性欠如の発現頻度と発現様式は近遠心的な骨格性不正咬合と関連するが、第二小臼歯と切歯先天性欠如のそれらは関連しないことが示唆された。

論文審査の結果の要旨

本研究は、日本人矯正患者における異なる近遠心的顎間関係と永久歯の先天性欠如の発現頻度と発現様式の関連について検討している。その結果、第三大臼歯先天性欠如の発現頻度と発現様式は近遠心的な骨格性不正咬合と関連するが、第二小臼歯と切歯先天性欠如のそれらは関連しないことを明らかにした。これらの知見は、矯正歯科治療の診察・診断と治療成果の向上の一助となる貴重な情報であり、歯学に寄与するところが多く、博士(歯学)の学位に値するものと審査する。

主 査 小 椋 一 朗
副 査 小 出 馨
副 査 小 松 崎 明

最終試験の結果の要旨

太田 信に対する最終試験は、主査小椋 一朗教授、副査小出 馨教授、副査小松崎 明教授によって、主論文に関する事項を中心として口頭試問が行われ、優秀な成績をもって合格した。